

氏 名	樋 口 進
学位の専攻分野の名称	博士(神学)
学位記番号	乙神第14号(文部科学省への報告番号乙第356号)
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位授与年月日	2014年2月26日
学位論文題目	古代イスラエル預言者の特質—伝承史的・社会史的研究
論文審査委員	(主査) 教授 水野 隆 一 (副査) 教授 浅野 淳 博 飯 謙 (神戸女学院大学教授・学長)

論文内容の要旨

請求論文は、題目にあるとおり、ヘブライ語聖書に現れる預言者の「特質」を解明しようとしたものである。これまでは傑出した宗教的存在として、個別に理解されることの多かった預言者を、古代イスラエルの社会的な文脈に置いて、その支持グループとの関係において理解しようとしているところに、この請求論文の特徴がある。

個別の預言者の検討に入る前に、第1章では、19世紀以降の預言者研究の動向がまとめられている。請求論文で用いられる社会学的、歴史批判的方法手法について簡潔に述べられている。また、1980年代以降行われることになったさまざまな方法についても紹介されている。

第2章から第6章は、本請求論文の第1部と見なしうるもので、預言者の使信、ことに彼らの社会的告発の内容について、王国以前の部族連合に遡りうるヤハウエの法の伝承がその背後に一貫して流れていることを明らかにしようとする。

第2章では、記述預言者以前の預言者(「初期預言者」)をヘブライ語聖書テキストに則して分析し、周辺文化との比較を行って、その特質を述べている。第3章では、最初の記述預言者であるアモスが伝承を受け継ぎながらカナン化した支配者階級を批判したと述べ、その背後に、「ヤハウエ主義者」と考えられる集団の支持があったことを主張している。

第4章では、アモスとそれに続く、いわゆる前8世紀預言者、とくにイザヤ、ミカを取り上げ、彼らの社会的告発に共通する要素を取り出そうとする。その結果、社会層の分化がなく、弱者が保護されていた部族連合の時代を理想とする一方、国家制度を整えるため導入されたカナンの官僚制度や経済制度、バアル祭儀との混交が、「カナン主義」として非難されているとする。

第5章では、ホセア書の保存するイスラエルの伝承について、分析が行われている。出エジプト—土地取得、荒れ野、契約など、王国以前の伝承が認められる一方、ホセアが独自の解釈に基づいてそれらを用いていることも明らかにされる。

第6章は、荒れ野伝承のうち、ヤハウエがイスラエルを「見つけた」とする“Fundtradition”が、ヘブライ語聖書、ことに、預言者に共通して認められることを述べる。そして、この伝承が荒れ野を理想化するグループ(カレブ人など南部部族)によって伝えられていたと推測する。

第7章から第11章は、本請求論文の第2部を構成しており、ここでは、預言者の召命記事に、それぞれの預言者の特徴が表されていることと共に、共通する要素が認められることを明らかにする。

第7章はこの後に続く章の導入であり、召命記事についての研究史を概観した後、イザヤやエレミヤ、エゼキエル、第二イザヤの召命記事を短く分析する。そして、これらの召命記事が、古代オリエントの周辺文化との関連から、預言者の権威を正当化するために記されていること、そしてそれは、ヤハウエ主義者たちから支持を得るために記されたことが述べられる。

第8章では、イザヤの召命記事について、さらに詳しく分析される。テキストを検討した結果、これは、召命記事の伝承や神顕現の伝承を用いながら構成されており、シリア・エフライム戦争を扱った「覚え書き」の冒頭に配されたものであるとされる。

第9章では、エレミヤの初期預言、ことに、申命記的宗教改革までに語られたと考えられる預言における伝承が分析される。そこでは荒れ野時代が理想化され、第6章で見た“Fundtradition”も認めることができる。エレミヤはこれらの伝承を、後にヨシヤを王位に就けるために活動した「アム・ハーアールツ」やレカブ人などヤハウエ主義者と共有していたとされる。

第10章では、エゼキエルの幻における預言者の特質が分析される。エゼキエルは記述預言者の中でも特異な存在であり、とくに、「幻」にその特徴が認められる。しかし、召命記事など、特異な体験を記したと思われる箇所についても、神顕現伝承や、混交した祭儀への批判など、他の預言者とも共通する特質を有していると主張される。

第11章では、第二イザヤの召命記事が分析され、その使命がどのように理解されていたかが述べられる。バビロニア捕囚という危機的状況の中で、第二イザヤは、レビ人など、ヤハウエ主義者の伝承を受け継ぎ、申命記史家の主張を受け止めることで、ヤハウエ主義をさらに進めて、「唯一神信仰」を確立させたとされる。

第12章は、請求論文の実質的な結論であり、預言者たちの言葉がどのように記録され、編集され、正典化されていったかを明らかにしようとする。弟子たちによって記憶され、書き留められた預言者たちの言葉がヤハウエ主義者たちによって伝承されたと考えられる。トーラーを編集し、第二神殿期の祭儀を独占したツァドク家の祭司によって排除されたレビ人が、トーラーに対抗し、トーラーを補完するものとして、預言書を編集し、正典化したと結論付けられる。

論文審査結果の要旨

ゲルハルト・フォン・ラートの『旧約聖書神学』以来、預言者は、それぞれの活動の社会的、政治的、経済的、宗教的背景の中で解釈され、一部の預言者に関してはその影響関係が論じられることはあったものの、ヘブライ語聖書における預言者に共通する特質は何かということは問われずにきたし、問うことのできないものとして扱われてきた。

本請求論文は、この学問的状況に対し、預言者テキストを詳細に検討することを通して、独自の見解を提示している。その際、預言者を傑出した個人（たとえば、「エクスタティカー」）としてとらえるだけではなく、「ヤハウエ主義者」と請求論文が呼ぶ集団から王国以前に遡りうる伝承を受け継いで現れたものとする点で、これまでの研究にない独自性を有している。また、このヤハウエ主義者集団が預言者を支持し、その言葉を伝えて編集し、最終的には正典化にも関わったとすることで、預言者運動全体をヘブライ語聖書時代史の中に貫して存在したものとして位置づけている。このことを明らかにする手法として用いたのが、「社会史的」な分析である。

請求論文においては「預言者とは何か」という問いは一貫しており、それを明らかにするための社会史的・伝承史的な分析も、手法において一貫している。それは、テキストの記述の核には歴史的状況が保存されているとする、伝統的にヘブライ語聖書学が取ってきた立場に基づいており、現在においても、広く認められているものである。

しかしながら、以下のような問題点が、口頭試問においても指摘された。

第1に、社会史的な分析をするために預言者について手にすることのできる史料は、ヘブライ語聖書以外にはほとんどないことである。従って、分析の対象となるのはヘブライ語聖書であり、周辺の古代オリエントテキストは参照されるに過ぎない。近年は、このようなヘブライ語聖書学のあり方に批判も示されている。また、預言者が用いた伝承が王国以前の部族連合時代に遡りうるとの主張であるが、これについても、近年は、疑問が提示されている。

第2に、重要な概念として度々用いられる「ヤハウエ主義者」について、請求論文においては、レビ人、「アム・ハーアールツ」など、さまざまなグループのあったことが言及されるが、それぞれのグループの社会史的背景についての分析は、十分ではなく、総称的なものに終わっている。

第3に、カナン対イスラエル、カナン主義対ヤハウエ主義、祭儀預言者対正典的預言者などの対立の図式はヘブライ語聖書学で広く受け入れられてきたものであるが、一方で、その単純化については批判もある。請求論文ではそれらの図式を前提としているため、テキストの分析が平面的になっていることは否めない。

第4に、近年提唱されるようになったさまざまな新しい方法について、序と第1章で簡単に触れられるだけで、十分な対話が行われていないことは、残念である。

しかし、これらの諸点は、ヘブライ語聖書における「預言者とは何か」をさらに深く追究するための今後の研究課題として上げられたもので、口頭試問において、請求論文申請者はこれらに対して適切に応答し、説得的に主張を展開した。申請者には、今後とも研究を進め、考古学や近年の文献研究とも対話を続けて、預言者の特質のさらなる解明を望むものである。

請求論文は、上にも述べたように、ヘブライ語聖書学の主流である方法を一貫して用い、テキストを綿密に分析することを通して、預言者の特質を明らかにしたものであり、高く評価すべき研究である。とくに、預言者運動をヘブライ語聖書時代史全体の中に位置づけ、ヤハウエ主義の伝承をその背景として取り上げた点に、学問的独自性がある。

以上のような審査の結果、審査委員会は、請求論文は博士学位を授与されるにふさわしいものと判断し、報告する。